人間社会デザインコース，アジア史における戦争と平和

新設科目の授業構築とその評価

社会科教育専修・矢澤知行

１．授業の概要

本授業は，教育学部２回生を対象に，アジア史上の戦争と平和の問題について，具体的な事例を挙げつつ論じる講義形式の授業である。2008 年度から発足した人間社会デザインコースの選択必修科目にあたり，今年度から新規に開講されたものである。本報告では，新設の授業を構築するにあたり留意した点と授業評価の結果について述べていきたい。

本授業では，受講者の到達目標として，人間社会デザインコースの研究・教育上の３つのキーワード（地域・福祉・平和）のうちの１つである「平和」について知識と理解を深め，戦争はなぜ起こるのか，平和を構築するための道筋にはどのようなものがあるのか，といった問題について自らの考えを述べることができる，という点を掲げている。

授業の内容は，平和学に関する基礎的な理論について，ヨハン・ガルトゥングの学説を中心に据えながら概観し，現代世界の戦争と平和をめぐる状況を俯瞰したうえで，旧オスマン帝国領の事例（バルカン半島とパレスティナの近現代史），北朝鮮を中心とした北東アジアの事例，9.11 事件以後のアメリカ合衆国と戦争をめぐる問題などについて具体的に論じるというものであった。

授業の構築にあたっては，単純な講話形式ではなく，受講生の興味を喚起するように，視聴覚教材を多用する形式を取った。具体的には，授業内容に関連するいくつかの映画作品を取りあげ，これらを視聴しつつ，その歴史的背景などについて論じた。講義の中で視聴した映画は，授業者が選択した次の４作品である。

- 『ノー・マンズ・ランド』（2001 年，ボスニア・ヘルツェゴヴィナ他）
- 『セプテンバー１１』（2002 年，フランス他）
- 『ボウリング・フォー・コロンバイン』（2002 年，カナダ他）
- 『プロミス』（2001 年，アメリカ他）

映画の視聴に際しては，毎回ワークシートを配布し，細部の留意点や，視聴後の議論につながるポイントについて，各々の受講者がメモを取れるよう工夫した。また，視聴後は，まず，①映画の内容に関する簡単な意見交換を行い，②そこから戦争と平和をめぐる諸問題に関する論点を引き出し，③それについて議論を深めつつ，④必要に応じて解説を行い，⑤最後に総括する，という一連の流れを意識して授業を進めた。

なお，受講者は計 20 名で，その内訳を所属別，学年別に見ると，次の通りである。

- 所属別
  - 人間社会デザインコース・・・16 名
  - 情報教育コース・・・・・・・4 名
- 学年別
  - ２回生・・・・16 名
  - ３回生・・・・3 名
  - ４回生・・・・1 名

２．アンケートの実施と質問項目

本報告書を作成するにあたり，「授業改善のためのアンケート」を実施した。全 15 回の授業の最終回にあたる 2009 年 7 月 24 日にアンケート用紙を配布し，レポートの提出時にアンケートも同時提出するよう求めた。

アンケートの質問項目は下記の８点であり，いずれも５段階評価による調査を行った。また，授業に対する感想や具体的な要望を記入するようための自由記述欄も設けた。

質問項目

①【あなたの意欲】この授業に積極的に取り組んだ。

②【シラバスの利用】授業の受講に先立ち，シラバスを読んだ。

③【シラバス通りの授業】授業はシラバス通りに行われた。

④【関心・興味】この授業で取り上げら

れた事柄について，関心・興味がわいた。

⑤【有用性】授業内容は自分の将来の進路，人生にとって役立つと思う。

⑥【教員の意欲・熱意】教員の授業に対する意欲・熱意を感じた。

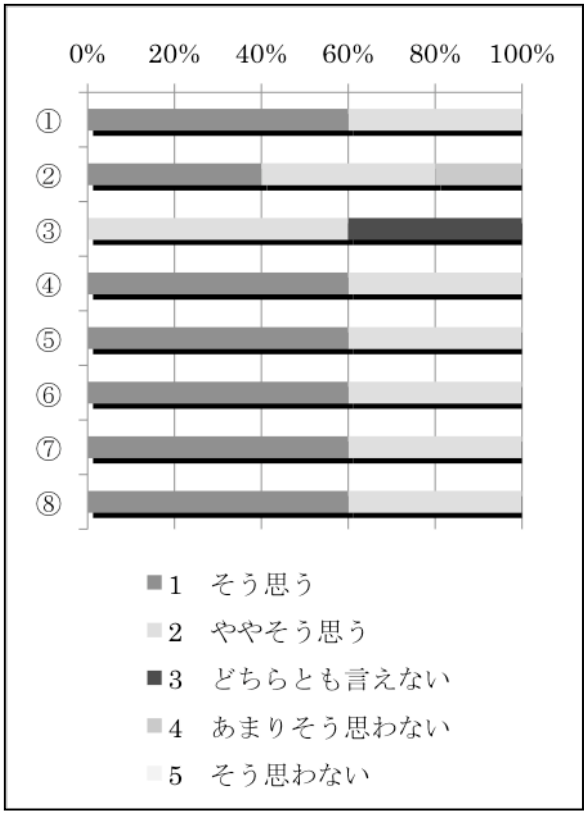
⑦【満足度】本授業は全体として満足のいくものだった。

⑧【おすすめ度】本授業の受講を他の学生や後輩にすすめたい。

３．アンケートの結果

アンケート用紙は受講者全員に配布したが，用紙の提出については必ずしも周知させることができず，結局，有効な回答が得られたのは５件だけであった。アンケート結果を集計し，その結果を整理して示したものが次のグラフである。

アジア史における戦争と平和　アンケート結果



４．総括と今後の課題

アンケートのほとんどの項目において，「１．そう思う」と「２．ややそう思う」との回答が得られた。

ただ，シラバスに関する項目②と③に関しては，必ずしも良好な結果が得られなかった。今回，新設科目を講じるにあたり，一定の授業計画を立てて臨んだものの，授業を進めていく過程において，現実世界で授業のテーマに直結する諸事件が起こるたびに，当初の授業計画から離れてそれらのトピックを扱う授業を随時行った。４～５月にはニューヨークで行われた NPT 準備会議について，５～６月には北朝鮮をめぐる核問題について論じたのがその例である。こうしたいわば“脱線”が，上述の回答につながったのかもしれない。

アンケートの自由記述では，教材については,“視覚的な教材が多くて,良かった。”,“見た DVD はどれも興味深くて，フィクション・ノンフィクションを問わず，世界の現実にもっと目を向けようと思わされた。”など,肯定的な評価が得られた。また，授業の目的や到達目標に関しても，“授業全体を通して，自分が見過ごしていた世界の戦争や平和についてたくさん学べた。”,”誰かと世界の平和についてもっと話してみたくなった。”,“作者のメッセージ性があって,いろいろなことを考えさせられた。”,“平和について考えを広げて，自分としての意見を持てるようになる。”,”世界で問題になっている戦争・紛争について，歴史・過程を理解できる。”といった評価コメントを得ることができた。

反省点としては，まず，授業で提示する資料のあり方が挙げられる。初年度は，上述のように映画作品を中心とした映像資料を多く用いたが,半期の授業を終えてみて，その選択や提示の順序について，工夫の余地があると感じた。また,映画だけでなく，写真や美術，文学，ドキュメンタリー，手記など，多様な資料を提示することによって，本講義の内容をさらに深化させることができるものと考える。また，受講者からの意見を引き出すための授業構成上の工夫についても課題が残された。ワークシートの内容や，受講生からの意見の集約と議論の展開などが，より洗練されたものになるよう，一層の研鑽を積んでいきたい。